

『あき』

愛知県岡崎市 三日月うさぎ

朝から制服を着て、
少し遅い電車へ乗り込んだ。
慣れない揺れに耐え、
誰かの目的地を伝える声片耳に
外の景色へ目をやる。
乾いた色が目立つ田畑から、
自分のいない中学校へ。
閑静な住宅街から
一層暗い高架下へ。
自分の上に行くバイパスから、
名も知らぬ工場街へ。
すぐに景色が変わったと思えば、
ビルの立ち並ぶ目的地で。
一瞬一瞬、全てが鮮やかに見えた。

空が重たいのも、
身体からのSOSが苦しいことも、
全てが気にならなくなる程。
とても幸せに感じた。

しかし、
この学校へ行くことを
何百回、
何千回、
何万回と繰り返すと、
段々、

何も感じなくなつて、
遠くの色彩よりも、
手元の波を追うように
なつていつてしまうのだろうか？
窓の外へ出ると、
ひゅうと風が吹いて。
体に叩きつけられた。
酷く冷たかった。
酷く悲しくなつた。
あきはさびしい。